

『死者表象の民俗学的研究—神格化と偉人化という観点から—』

要約

及川祥平

はじめに

本研究では、日本における死者表象の問題を、民俗学的な「人を神に祀る風習」研究の文脈から、記憶論を理論的支柱としつつ明らかにした。具体的にいえば、偉人化という動態に神格化と同等程度の重要性を見出すことで、従来の議論においては積極的には論じられてこなかった人神の側面を解き明かしてきた。以下、各章の議論を整理する。

1、各章の概要

(1) 第1部「近代日本の神格化と偉人化をめぐる世相」

第1部「近代日本の神格化と偉人化をめぐる世相」では、二つの章を設けつつ、近代の「神」と「偉人」をめぐる社会・文化の概況を掴みとることを目指した。

第1部第1章『顕彰神』論—楠木正成の表象史から—は、人神の派生形としてその近代性が指摘される傾向にあった顕彰神について、その代表と目される楠木正成を素材としつつ、前近代からの表象史を強調することで、顕彰神の性格を解き明かした。祭祀施設に焦点をおくかぎり、楠木正成は近代的なる神である。しかし、表象史という視点でこれを検討する時、楠木正成の神格化は前近代が用意してきたものと理解せねばならない。これによって、人神の「近代」を問題とする上で論点とされるべきは「神格化の動機の近代性」ではなく、近代における人神の活用の用法であることを指摘し、顕彰を動機とする神格化の歴史性への注意喚起を試みた。

第1部第2章「偉人化される死者たち—近代の贈位をめぐる—」では、近代の状況を俯瞰する作業を行なった。とりわけ、ナショナルな論理に基づく価値づけが個々のローカルな人物表象に作用する様態の諸相を示すことで、近代社会における偉人化と神格化の分かち難さ、そして偉人化の結果もたらされた状況の性質を明らかにした。とりわけ、近代の偉人顕彰を「上からのもの」として退ける論調に対し、積極的に「上からの評価」を求める人々の姿を示すことで、現象の複雑性をより冷静におさえていくべき余地があることを主張した。贈位は人を神に祀る風習研究においてこれまで必ずしも重視されてこなかつ

たが、各地の人物表象に影響した例が少なからず存在することを鑑みるかぎり、今後この方面の議論において注意すべき事象であるといえる。

第1部の議論は続く各章で論点とされる諸問題の縮図でもある。楠木正成を通しては、末裔者という存在、物語（あるいはメディア）論、人物表象における勤皇化という問題、想起の文脈依存性あるいは複数性という諸問題に言及した。贈位をめぐっては、偉人のナショナル化とローカル化、両者の論理の相互性ないし緊張関係、より具体的な現象としては、国家的権威と歴史学の関与による祭祀の場と末裔者の系譜の固定化あるいは序列化という諸問題に言及した。この問題は、正史・国史の形成・編集とその実質化という論点とも関わる。以上のそれぞれの問題は第二部以降の各章で再度検討した。

（2）第2部「神格化と偉人化の実態」

第2部「偉人化と神格化の実態」では、包括的議論ではなく、個別事例の報告と分析に重きをおいた。とりわけ、偉人化と神格化の複合的動態がうかがえる武田信玄の表象史、厳密な意味での神格化は行なわれない偉人化の事例としての大岡忠相の表象史、伝説における偉人（あるいは為政者）の表象化の様態をそれぞれ明らかにした。

第2部第1章「郷土の偉人の変容―山梨県における武田信玄祭祀の近世と近代―」は、信玄の神格化および偉人化の過程を、近代的なナショナルな論理とローカルな論理の交錯による表象の変容論として捉えるものであった。とりわけ、近世のローカル法や身分制度に関わる権威として想起される側面のつよかった信玄は、近代以降、ナショナルな歴史知識を前提とした表象化と表象間の競合の過程にさらされ、その一方で、山梨県（民）という一体性を支えるシンボルとして位置づけられるようになる。

第2部第2章「偉人の発見―大岡忠相墓所の史蹟化と贈位祭の検討から―」は、贈位を契機とする地域の偉人の発見を問題化したものである。また、贈位によって評価された人物像（ナショナルな論理）と、実際に地域との関係性のもとで崇敬されていく人物像のズレにも注意を向けた。とりわけ、物語世界における造形化が人々の想起をつよく方向づけていたこと、つまり国家的顕彰が、個々の人々の想起の内実を必ずしも強力に規定するものではなかった可能性を指摘した。

第2部第3章「伝説にみる偉人の神秘化と権力―信玄・家康伝説を中心に―」では、前近代的な説話的言説による偉人の表象化の様態を問題とした。第一に、権威の源泉として偉人を捉え、偉人と自身を関係づけることに眼目のある由緒書的使用法の伝説に注意を向け

た。これらの伝説が説明しようとするものは、特権や格式の高さ、歴史性である。第二には、そのような偉人が、超自然的効力を発揮して自然環境に働きかけたことを語る伝説の存在に注意を向けた。それ自体は類型的な自然説明伝説であるが、地域内外で宗教者の不可思議な力とともに語られる環境の改変というモチーフが、これらの世俗的為政者にも見受けられる点から、日本文化における偉人化と神格化の近接性、あるいは世俗的権力者に人を超えた力を期待する想像力の存在を指摘した。

第2部の議論からは、第1部第1章でも言及した、近代の人神をめぐる従来の理解の問題性があらためて確認される。信玄は、第2部第1章および第3章の議論をふまえるかぎり、質的相違があるとはいえ、近世から明確に偉人化・神格化の眼差しが向けられており、顕彰神としての信玄はその表象史をふまえることなく理解すべきではない。第2部第2章の大岡忠相の場合、近世以来の大岡政談等の物語世界での人物像に方向づけられつつ想起される傾向があった。また、第2部第3章における信玄と家康の伝説の検討からは、前近代的な説話世界においてすでに権力主体を神的に表象する発想のあったことが改めて確認できる。由緒書的な歴史参照の文化が、人物の神的表象化を導いた可能性を視野におくべきであろう。近世以前からの権威跪拝的意識や既存の物語世界における表象が、近代の神格化・偉人化に対して相応の影響力を発揮したとすれば、時に人々や生活との断絶性やそれへの暴力的関与が強調される近代的価値観が、人々の慣習や意識に下支えされていた可能性を改めて認識する余地がある。

（3）第3部「現代社会における神と偉人」

第3部「現代社会における偉人と神」の各章は現代社会における偉人と神の状況を把握しようとしたものであるが、基礎的な論点は先行する各章から引き継いでいる。

第3部第1章「偉人の観光資源化と祭礼・イベント—大岡越前祭と信玄公まつり—」は、第2部でおさえた信玄と忠相の観光資源化を記述するものであった。議論の主題は、二点にわたった。第一に、祭礼・イベントで現前化される過去のビジョンの質、第二に、現代社会における世俗的催しや記念物が、時に宗教的なものとして解釈されたり、宗教性を取り込むような現象の解明であった。すなわち、偉人化と神格化の近接的状況が今日の社会においても顕在化することを指摘し、そこにうかがえる擬似神格化とでも呼ぶべき現象を導くものを、「らしさ」をめぐる人々の感性（「形式感覚」）であると理解した。

第3部第2章「教育資源としての神・偉人—赤穂市における義士教育を中心に—」では、

元禄赤穂事件の四十七士の赤穂市における取り扱いを対象化した。議論の主題は資源化の
一様態としての歴史上の人物の教材化（教育資源化）とその活用にあったが、四十七士は
『忠臣蔵』等の歴史物語のもとで造形化されてきた人々であり、マスメディアの影響につ
いても考察を加えた。第3部第1章で取り上げたようなイベント・祭礼をめぐる議論が、
対外的アイデンティティ提示のための資源として歴史を強調するのに対し、教育資源化と
いう観点からは、望ましい歴史意識を有すコミュニティ成員の育成を志向し、観光化され
ている史蹟や祭礼もそのような教育に活用される状況のあることが確認できた。また、こ
れまでの議論では、マスメディアの優勢な影響力を指摘してきたが、赤穂市の義士教育は
フィクションが増幅してきたイメージの相対化を目指しており、それは近代における四十
七士の社会資源化状況への反省ないし批判を前提としていたことを指摘した。その一方で、
メディア状況の変化によって、児童・生徒の四十七士への関心そのものが減少しているこ
とも明らかとなった。メディアの影響論は、その拘束性の強さを前提とするのではなく、
多視点的かつ実証的研究の積み上げを課題とするといえるであろう。すなわち、メディア
社会を生きる諸個人を重視する受容・利用・体験論的方向性のもとで、議論の深化がはか
られねばならない。

第3部第3章「子孫であるということ——その立場性をめぐって——」では、個人の歴史的
アイデンティティへの関心から、歴史上の人物の末裔者であるという立場性とは、どの
ようなものであり、それはどのようにふるまわれているのかという問題に取り組んだ。こ
れらの人々が公共領域で発信される様々な歴史表象に対し違和感を表明する姿からは、歴
史への態度は常に複数的であり、歴史をめぐる言説空間が本来的にもつ競合的な性格が明
らかである。「歴史」は、必ず「誰か」あるいは「どこか」や「なにか」の現在を説明づけ
る物語たり得るのであり、誰にとっても重要性の均質な「歴史」などというものはこの世
のどこにもない。そのような均質な公共の歴史の不可能性（あるいは問題性）を前提にし
て言えば、ある「歴史」を否定し、あるいは嘲笑することは、その歴史を自己の文脈化に
使用するその人そのものを、つまり個人の歴史的自己像を侮辱することである。

以上、第3部の議論は、本研究が歴史的経過の中でおさえてきた日本文化における偉人
化と神格化の複合傾向の現代における状況、および、偉人化・神格化される死者に向き合
う個人による想起（それを方向づける幾つかのファクター）、そこから導かれる歴史認識論
的問題を明らかにするものであった。

以上をふまえて、本研究の成果を明確化しておきたい。

2、本研究の成果

(1)「祟り神起源説」および「民俗の純粹化」志向批判

本研究は、従来の「人を神に祀る風習」研究において自明化されている学説あるいは文化史像とは異なる位相での議論を構想し、先行する議論を学説の一つとして相対化することを目指した。本研究をふまえると、祟り神起源説とでも名づくべき、人神信仰史の基礎的歴史観には再考の余地があることを指摘することができる。

「祟り神起源説」とは、人を神に祀る風習の本来的な形式を「非業の死者」の祟りを鎮めるための神格化とし、死者の生前の事績を讃えつつ行なわれる神格化はその派生形であるとする理解である。この学説は、柳田國男の人神研究をベースとしている。柳田は「顕彰神」の創建ラッシュとでも名づくべき同時代の状況を相対化する戦略のもとで「祟り神」的人神を強調したものと推測するが、そこに単線の変遷論ないし拡張説を構想した点に問題があった。死者の護国の神化を近代的なる現象として捉える点において柳田説は首肯できるものの、「人格の崇敬を主」とする人神祭祀は果して拡張の結果出現したものであったか否かは検討を要する。日本で最初の怨霊の神格化に先だって、世俗的功績を讃える祭祀が存在することは第一部第一章で指摘した。怨霊の鎮静化に向けて生前の世俗的功績を讃えることがあったことにも注意が必要である。

本研究では、祟り神、現世利益の神、顕彰神というそれぞれの神格は、系統的前後関係としてではなく、想起の文脈の相違と理解すべきものと考えた。祟り神、現世利益の神、顕彰神のそれぞれは、時代の社会・文化状況によって優勢化する場合はあるものの、本来的には並存可能であり、顕彰神も祟り神と同等程度の歴史性を想定することが可能である。少なくとも日本における「人を神に祀る風習」の歴史は、きわめて複雑な経過の中で今日に至っているのであり、民俗学が基礎としてきた「祟り神起源説」やこれと同様の発想形式が導く単線的かつ段階的拡張説は、自明の前提ではなく、一つの学説として相対化されるべきであろう。

そして、このような民俗学の「祟り神起源説」偏重の背景に、「民俗」や「民俗宗教」という枠組への排他的性格づけがあることを本研究では明らかにした。そこに、民俗の「混交性の不可視化」と「至高化」のニュアンスがあることを鑑み、仮にこれを「民俗の純粹化」志向と名づけた。これは「民俗」として把捉される一群の習慣・習俗とは峻別すべき一群の文化事象を、ネガティブに記述する傾向でもある。

「民俗の純粋化」志向は、所謂ハイカルチャーや政治的なものと切断されたものとして、人々の文化（民俗）や生活を描く。文化の混交性を自明化しているはずの今日の民俗学においても、この志向性が研究者の視線を拘束する局面がある。とりわけ、これが民俗学的人間モデルの問題に偏りを発生せしめていることは重く受け止められねばならない。例えば、戦死者祭祀をめぐる、国家の暴力性を指摘するあまり、それとは根本的に相違し、かつそれによって抑圧されてきたものとして、「民俗」やそれを保持する人々を捉える視点である。顕彰神が民俗学の主要論及対象から除外される傾向もこの点に関わってくる。しかし、時代の支配的な価値観とは無関係に、まったく迎合的態度をとらずに生活することが、どれだけの人々に可能であったのかは推し量りがたい。柳田國男が指摘した日本人の事大主義とは、状況に応じて意識的・無意識的に態度を変えながら柔軟に生活を存続していく人々のあり方（そしてその問題性）ではなかったか。また、「ハイカルチャーや政治とは無関係の生活（あるいは人間）像」は、人々の生活実態であるよりは、民俗学的視点の偏向や方法論が図らずも結んでしまったイメージである可能性が高い。このような視点で、顕彰神を民俗宗教の派生形として矮小化せしめたように思われる。

以上の従来の学説の問題点を意識しつつ、本研究では「人を神に祀る風習」を「記憶される死者」（したがって想起されつづける死者）の表象の問題と捉えた。この視点からは、「当該個人に見出されるなんらかの突出性ないし異常性がその記憶化を促す」というきわめて単純な事実を命題として提起することができるが、本研究では、死の異常さはもちろん、生前の非凡な事績や人間性もまた、死者を記憶にとどめておくことの根拠として決して新しいものではなく、また人々の日常的思考と隔絶したものではない可能性を指摘した。

（２）人神の近・現代

本研究では記憶論をふまえた視点によって、暴力的で非民俗的なものとして矮小化されつつ理解される傾向にある「近代」の世相、そして、同様に民俗学的議論においては応用的位置づけにとどまる場合の多い「現代」の状況を、積極的な記述対象とした。

では、そのように把握されるところの人神の「近代」そして「現代」は、どのように記述することができるのか。換言するならば、近代および現代は人の偉人化・神格化の上になどどのような影響を及ぼしているといえるのだろうか。

すでに述べたように、顕彰神の成立が近代的現象なのではなく、顕彰神の国家を前提とした資源としての活用の様態に近代性があったという理解に本研究では立った。例えば、

正成の事績・人格への称賛や憧憬を介した神格化はすでに近世には行なわれていた。近代の日本は、これを勤皇・報国の範とし、武士的道德を国民一般に求める文脈で利用したといえる。あるいは、ローカルな事例としては、日本を構成する山梨県という想像の共同体の構成員を、血や魂を介したつながりを想定することで精神的・身体的次元で規定するかのように位置づけられた武田信玄は、明確に社会統合の資源として活用された例と言わねばならない。国家ないしその構成要素としての郷土というフレーミングが介在し、成員に均質ななにかを求める際の資源として利用された点に、「近代における人神」の特徴があったといえる。そして、この点は近代の文化政策一般との兼ね合いのもとで理解されねばならない。近代日本は、例えば民力涵養運動を介して在来の文化事象を改変しつつ国民統合に利用し、文化の画一化に働きかけてきたが、多様な先祖観が「敬神崇祖」の名のもとで一元化されつつ国民道德化されたとはいえ、先祖という観念やこれをめぐる文化がそれまで存在していなかったわけではない。同様に「すぐれたる人」をめぐる観念やその祭祀もまた、相応の歴史性を背景にもちつつも、近代において国民化に動員されたものと見る余地がある。それは中村のいうように換骨奪胎であったかもしれないが、崇り神の換骨奪胎などではなく、文字通り、顕彰神（あるいは顕彰神的なるもの）の換骨奪胎であったと言えるのではないだろうか。

近代という時代は、その一元的なナショナルヒストリーの暴力性が強調される傾向にある。たしかに、歴史や人神をめぐる近代国家の働きかけは、近代的学問としての歴史学とともに、史実や史蹟の固定化に作用していく。しかし、歴史の主観性の次元で言えば、そのような一元化への促しは、均質な歴史観を人々に結ばしめ得なかったとみたほうがよい。信玄や忠相の例に明らかであるように、国家や学問が人々に想起するよう求めた偉人像と、実際に人々が好んで想起した偉人像との間には食い違いがあった。さらに言えば、未完の一元化状況は、階層性を生み、競合的状況を生みだすに至った。このような一元化の不完全性には、アイデンティティをベースとする歴史想起の主観性の問題が関わるが、その一方で、「マスメディアの時代」としての近代の性格が、一つの要因として浮上してくる。「近代」は近世以来のオーラルな物語が、マスの媒体において複製再生産され、広域に享受されるようになった時代でもあった。その中で、娯楽的な歴史物語の中で、登場人物はフィクショナルな逸話によってヒーロー化の過程を進んでいった。そのように述べたとはいえ、本研究は娯楽物語を無害化・純粹化するわけではない。近代の歴史物語にも、相応に近代的思想への促しが読み取れるのであり、国家の方針と合致する人物形象を、マスメディア

が量産していったことも忘れてはならない。

現代の世相については、まず近代からの連続において理解すべきものがある。第一に、マスメディアのさらなる普及・発展である。小説、映画等を賑わせていた歴史上の人物たちの物語は、テレビの普及によってお茶の間でも楽しめるようになった。ただし、大岡越前や忠臣蔵が若年層の支持を得難いように、取り上げられる人物の傾向や物語の質は大きく推移している。戦国武将を中心として、武将の「イケメン」化は様々な時代の人物に及んでいる。人物表象の外見への関心は、すでに演劇的歴史表象から映画・テレビへの展開の中で、俳優ないしその演技への審美的意識として存在したものと思われるが、今日は漫画・アニメ・ゲームといった二次元的な視覚メディアにおける理想化がサブカル領域で存在感を発している。

国史と郷土史、愛国心と郷土愛を結ぶ回路とも関わって、自地域を前提として偉人を特別視する「郷土の偉人」という枠組は、このようなメディア状況をふまえ、地域統合の社会資源という性格よりも、自治体の経済資源としての性格を前景化させる傾向にある。史蹟めぐりにもまた歴史があるとはいえ、想起の空間の観光化は、戦後社会にひととき顕著な現象といってよいだろう。祭的な空間において主題化される人物の表象は、当該空間が要請する形式感覚のもとで、時に擬似神格化的様相を呈することもある。今日の世相においても、人・神の間隔の近しさという論点は高い有効性を示すといえるであろう。

一方、戦前的な価値観で彩られた経緯のある「偉人」や人神は、今日、その戦前的色彩の払拭に意を注いでいる。とりわけ、歴史の教育資源としての活用が意識される場においては、この点は重要な問題とされている。また、平和を希求する社会的・世界的価値観をふまえて、偉人の軍事的功績は必ずしも強調されない。人神祭祀神社では、むしろその文化的功績をたたえようとする意識が示されるが、マスメディアで生産される戦いの物語に基づくイメージは根強い。記憶化の主体と想起の主体の意識のズレは今日なお発生しているといえる。

また、現代の世相を、近代以降の人の移動の活発化、就労傾向の変化に起因する地域社会の崩壊・弱体化過程と捉えるならば、その影響は自己を差異化する資源として歴史を所有する人々のあり方にも影響を投げかけている。歴史上の人物やその家臣の末裔であるということが社会関係の中で相応の意味を担う場からは切断された人々が、その自己認識を満たす場として、広域的な末裔者の組織化が行なわれている例を本研究では取り上げた。これらの人々は、マスメディアや歴史学が構成する物語とは異なる歴史観を保有する場合

もある。

（３）死者想起の様態の解明

本研究の方法論的独自性として、人間の記憶実践の中でも「記憶化」と「想起」をキーワードとした点をあげることができる。序章で確認したように、記憶化と想起のどちらかのみを記述するようなアプローチは意味を為さないが、とりわけ「想起」を重視したことで以下の点を明らかにすることができた。

第一に、想起の複数性である。「想起」という行為への着目はその「主体」への関心を導く。そこに見出せる主体間の相違が、「想起」の複数性の認識に帰着するのは当然ではある。本研究は、そのような複数性の様態とその背景を記述的に解き明かすことを試みたが、この点は、人神の単線的変遷説への批判としても、民俗学にフィードバックできることは先述の通りである。このような複数性は想起主体の個性と歴史的・社会的な規制力に起因するところが大きい。武田信玄が崇敬される一方でその墓が崇りの土地として認識されること、楠木正成や結城宗広の墓が勤皇の偉人の史蹟として整備される一方でそこが歯痛の神として信仰されることは、主体の立場性の相違と、墓や塚に対する慣習的態度の問題が関わっている。あるいは、現代社会における歴史上の人物ないしその家臣の末裔者の行動にも、同様の論点を見出すことができる。

第二に、個人の想起への社会・文化による規制力は、想起の複数性の原因となる一方で、集団性ないし集合性をももたらすことになる。すなわち、諸個人の想起は個人の主観的現象である一方で、その他の個人による想起や各個人間で共有されている（と認識される）形式や内容と緊張関係にある点において（そして、それが客観的なものではあり得ない点において）、「間主観的」現象の側面をもつ。想起の複数性、歴史認識の複数性は、主体の数だけ想定できる無限の多様性にはひらかれていないのである。この点には、想起は言説その他によって表現され、表出したものとしてしか研究者に観測され得ないことも関わっている。この複数の主観的認識の間に見出せる共通性を、歴史的な、あるいは同時代の社会条件からの拘束性の複合の結果と捉えるならば、集合的記憶（文化的記憶・社会的記憶）とは、社会や政治からの働きかけのみならず、人々の慣習化された意識や感覚に型押しされた過去のビジョンであり、優れて民俗学的な対象領域であるといえる。歴史をめぐる近代国家の思想的・政策的問題性の所在と、日本文化論的傾向性の問題とを弁別していくことで、大多数の人々の歴史認識がどのような経過において形成されて現在の様態を結

んでいるのか、あるいは私たちの「歴史」体験の文化的諸様式がどのような歴史的経過の中にあるのかを問う、民俗学的「歴史認識」論、あるいは「歴史認識」の民俗学という領域を構想することができるのである。

むすびにかえて

以上の成果を整理し、むすびにかえる。

死者の偉人化は歴史的現象であり、その神格化との複合にも崇り神的人神と同等程度の歴史性を想定すべきである。その際、仏教的・儒教的人物表象の様態を注視すれば、既存の「崇り神起源説」的理解は、学説の説得性を薄めることになるであろう。近・現代は偉人化と神格化の複合型である顕彰神を量産したが、それは「崇り神的人神」を改変しつつ生み出された新しい文化現象であるというよりは、あらかじめ存在した顕彰神あるいは顕彰神的なるものの政策的活用であったといえる。そのような認識にたつて現象を検討する時、人神の近代性とは「国家」という枠組において理解すべきものであるといえるが、その一元化志向は、歴史をめぐる競合状況や複数性を顕在化せしめるものでもあった。現代の人神の状況は、近代の人神の状況を基本的なフレームとして踏襲しつつ、質的にも連続する面が大きいが、相違も見出せる。それは戦前的なるものへの反省的意識と、経済・観光資源としての隆盛といえるだろう。

そして、本研究の記憶論的方法論が説き明かしたのは、想起主体の複数性と、個々の想起の間主観性である。すなわち、きわめて個人的であるはずの想起が、歴史的・社会的に拘束されていることへの自覚化が促される。とりわけ、想起にうかがわれる同時代的条件からの規定、慣習化の力学によって過去からもたらされている傾向性の所在を突き詰めていくことで、民俗学が「歴史認識」を問題化する際の基本的スタンスのあり様を示し得たように考える。